

氏名	笠原 浩美		
学位の種類	博士（芸術学）		
学位記番号	博甲第 10707 号		
学位授与年月	令和 5 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	国吉康雄の作品における色彩変化と描画材 —関係資料と再現実験にもとづくカゼイン絵具使用の検証—		
主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	田島 直樹
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	仏山 輝美
副査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	林 みちこ
副査	宇都宮大学准教授	博士（芸術学）	株田 昌彦

論文の内容の要旨

笠原浩美氏の博士學位論文は、国吉康雄（1889-1953）の作品における色彩変化の要因を多面的に検証し、描画材と絵画表現の連関に着目して国吉作品におけるカゼイン絵具の使用について検討したものである。その要旨は次のとおりである。

第 1 章では、著者は国吉作品を 4 期に分け、当時のアメリカ美術界における国吉の動向を踏まえながら、モチーフ・表現内容・色彩の特徴の観点から各期における作品の傾向を分析している。著者によれば、国吉作品に描かれたモチーフの多くは風景・静物・女性像であり、晩年にはサーカスを題材にした作品が多く見られる。国吉作品の色調は、1925 年と 1928 年の渡仏後に変化が認められるが、1940 年代後半までアースカラーが基調である。しかし、1940 年代後半以降、作品の色調は一変し鮮やかな色彩で構成される。著者は以上の分析結果をもとに、先行研究やインタビューを行った関係者の見解を踏まえて考察を展開し、国吉作品における色彩変化の要因として①ジュール・パスキン（Jules Pascin, 1885-1930）との交流、②カラーフィールド・ペインティングの台頭、③カゼイン画の制作経験の 3 点を抽出している。

第 2 章では、著者は国吉作品の色彩変化に関わる 3 点の要因についてそれぞれの妥当性を検討している。まず、パスキンとの交流を背景に透明色を重色するグレイズ技法によってより豊かな色彩表現が開発されたとする見解について再考している。次に、同時代の表現を追究する国吉にとって、カラーフィールド・ペインティングの隆盛が自作における色彩の転換を促す契機となったとする見解について検証している。そして、カゼイン画の制作経験が色彩変化の最も大きな要因であるとする先行研究の見解を踏まえて、国吉がカゼイン絵具に求めていた表現上の効果を確認している。カゼイン絵具の性質やカゼイン画特有の表情についての理解を深めるために、著者自らカゼイン画を制作したうえで、同技法を実践する画家へのインタビューを行うとともに、わが国におけるカゼイン絵具の受容について調査し分析している。結果、カゼイン絵具の特筆すべき性質は「鮮やかな色彩、速乾性、光沢のないマットな質感、明度の高さ」であるとまとめている。また、そうした傾向の色調や画表面の質感は、晩年に国吉が描いた一部の油彩画にも見られると指摘し、次章以降における再現実験とその考察につなげている。

第3章では、著者は国吉の油彩画《ミスターエース》(1952年)を対象に行った計2回の再現実験について報告している。1回目の模写では一般的な油絵具の白、2回目では国吉の処方にもとづく「白色絵具(カゼイン溶液・白色顔料・卵・水・スタンドリンスード・ダンマル樹脂溶液・テレピン・油絵具〔白〕の混合)」を用い、画用液はいずれの模写においても国吉の処方による「メディウム(スタンドリンスード・ダンマル樹脂溶液・テレピンによる調合油)」を使用している。これらの「白色絵具」および「メディウム」は、スミソニアン・アメリカ美術アーカイヴに残された国吉のメモをもとに著者によって製造されたものである。原作の色調に近づけるために、1回目の模写では主に透明色によるグレース技法を試み、2回目の模写では「白色絵具」を用いた半透明色の上塗りの効果に注目し試行している。結果、油絵具のみを使用した1回目の模写に比べて、2回目の模写では画表面の光沢を抑えることができ、色彩の明度が上がり、パステル調の色彩が得られたと分析しており、「白色絵具」を用いたことで色調や画表面の質感を原作に近づけることができたと述べている。

第4章では、著者は国吉の油彩画《ここは私の遊び場》(1947年)を対象に実見しながらの模写に取り組み、「白色絵具」および「メディウム」を使用して原作の再現を試みている。当該作品に見る色調や画表面の質感を再現するために、「メディウム」の使用ではテレピンの調合割合に留意しつつ描画し、「白色絵具」の使用では薄く半透明な「白色絵具」の上塗りや他色との混色に加えて、「メディウム」を用いた透明色のグレースによる色調の調整を試みている。再現実験の結果、著者は、カゼイン成分を含む「白色絵具」によって白みがかかった色彩や硬質でかさついた画肌を得、原作の色調や画表面の質感に近づけることができたと判断している。

以上、国吉作品における色彩変化について著者は、実見調査、先行研究の見解、関係者へのインタビュー結果をもとに3点の要因を抽出し、各要因の妥当性を丁寧に検証している(第1章、第2章)。先行研究で指摘されるようにカゼイン画の制作経験が色彩変化の大きな要因であるとまとめたうえで、晩年の国吉作品にカゼイン画の色調や画表面の質感を連想させる油彩画があることを指摘し、それらがカゼイン絵具と油絵具の混合によって描かれた可能性について言及している。この推測のもと、著者は、国吉の油彩画《ミスターエース》《ここは私の遊び場》の再現実験に取り組み、カゼイン成分を含む「白色絵具」と油絵具の混合・併用によって原作の色調や画表面の質感に近づけることができたと報告し、その具体的な手法を提案している(第3章、第4章)。

審査の結果の要旨

(批評)

国吉作品における色彩変化の要因と考えられるカゼイン絵具について、その特性や表現効果を明らかにする本論文は、作品の物質的な側面に深く切り込むものであり、国吉の生涯や画業を考察した数々の先行研究を補完する新たな知見を多く含んでいる。また、スミソニアン・アメリカ美術アーカイヴに残された国吉の画材関係資料を抽出し、詳細に読解した上で再評価したこと、国吉作品の表現内容・方法について技法材料の観点からアプローチした実践と考察は有意義な成果と認められる。著者の制作者としての知見と洞察により、国吉の一部の油彩画にみられる色調や画表面の質感はカゼイン成分を含む絵具の使用によって概ね再現可能であるとする見解は、国吉研究の進展に技法材料の観点から寄与し得る興味深い提案である。

令和5年1月19日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。